

基本色のカテゴリーの境界を描く ことに挑戦する子どもたち



◆小中学生が色認識の仕組み学ぶ◆松山
脳がどのようにして色を認識するかを学
ぶ講座が13日、松山市文京町の愛媛大であ
り、小中学生27人が大学教員から色覚のメ
カニズムを学んだ。

次代を担う理系人材の育成を目指す科学
技術振興機構（埼玉県）と全国の大学など
による「ジュニアドクター育成塾事業」の
一環。東北大電気通信研究所の栗木一郎准
教授が講師を担当した。

栗木准教授は「色は目で見ているのでは
なく、脳で見ている」と強調。目の錐体（す
いたい）というセンサーからの信号が変換
され、色に関する情報処理を脳で行ってい
ると説明した。

「赤とオレンジの間」というように、脳
はいくつかの色をまとめて一つのグループ
「カテゴリー」をつくっていると説明。
子どもたちは基本色11色のカテゴリーの境
界を描き、それぞれの境界線の違いを比較
していた。

松山市東中学校1年の宮下隼一さん(13)
は「今まで色は目で判断していると思っ
ていた。紫やピンクなどの色は人によっ
て境界が違っていた」と話した。

（薬師神亮太）